

# 「の」の意味論と語用論再考：容認度に反映される文脈への貢献度<sup>i</sup>

## Contextual effects of the Japanese adnominal particle *no*

原田康也, 首藤佐智子  
Yasunari Harada, Sachiko Shudo

早稲田大学法学学術院  
Faculty of Law, Waseda University  
harada@waseda.jp, shudo@waseda.jp

### Abstract

In this paper, the Japanese adnominal construction [NP<sub>1</sub> *no*] is examined with respect to its pragmatic contribution to the contextual effect of the proposition. We argue that acceptability of noun phrases of the form [NP<sub>1</sub> *no* NP<sub>2</sub>] reflects their likelihood to have a contextual effect.

**Keywords** — adnominal particle *no*, relevance, contextual effect, pragmatic constraint, acceptability

### 1. はじめに<sup>ii</sup>

「日本史の学生」における「日本史の」のように後置詞「の」が主辞となり構成する連体修飾句「NP<sub>1</sub> の」の意味の多様性に関しては多くの研究がなされている。<sup>iii</sup> 西山(2003)の分類は、それが意図されたものかどうかはさておき、NP<sub>1</sub> と修飾される NP<sub>2</sub> の関係には語彙意味論的制約はないことを示唆している。すなわち、「NP<sub>1</sub> と関係 R を有する NP<sub>2</sub>」とするタイプ A を設定し、その関係は語用論的に決定されるとする分類は、いわゆる pragmatics=wastebasket 方式を踏襲するものであり、NP<sub>1</sub> と NP<sub>2</sub> の関係に課される制約の語彙意味論的説明としては寄与しない。本稿では、「NP<sub>1</sub> の」という修飾句が文の「コンテキスト効果」(Sperber & Wilson 1986) に貢献するという語用論的制約が存在するとの仮説をたて、その検証を試みる。ここでは、NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> の部分である場合に焦点をあて、文脈を持たない独立した句レベルでの容認度判断は、同形式の修飾句が文脈において使用される尤度を反映するものである可能性を示唆する。

### 2. NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> の部分である名詞句

NP<sub>1</sub> が表す対象が後続する名詞句 NP<sub>2</sub> の表す対象の「部分」である場合に限ると、ある種の制限が働いているように思われる。例えば以下の例である。<sup>iv</sup>

- (1) a. 長い髪の男性
- b. \*髪の男性
- (2) a. 嫌な性格の人物
- b. \*性格の人物

(3)(4)の例を見ると、「NP<sub>1</sub> の NP<sub>2</sub>」の用法は、NP<sub>1</sub> 自体が何らかの統語的要素によって修飾されている必要があるというような一般化が考えられるかもしれないが、(5)のような例を考慮するとそのような一般化が成り立たないことがわかる。

- (3) a. 黒い上着の男性
- b. ??上着の男性
- (4) a. 茶色の靴の人
- b. ??靴の人
- (5) a. 丸い眼鏡の学生
- b. 眼鏡の学生

(3b)(4b)に比して、(5b)は明らかに容認度が高い。

### 3. 容認度に反映される文脈貢献の尤度

本稿の著者たちは、文脈を持たない句レベルの容認度が低いのは、同形式の修飾句が実際に使用される尤度が低いことを反映しているためであると考えられる。すなわち、「上着」「靴」に比べると「眼鏡」の着用が人の属性として使われる尤度は明らかに高い。

- (6) 今日は学生が2人しか来なかった。一人は1年生だと思われる童顔の学生、もう一人は3年か4年ぐらいの眼鏡をかけた学生。眼鏡の学生は、英語が堪能で、BBC ニュースは毎日欠かさずに見ているという。
  - (7) 学生の中には、コンタクトレンズを着けている者もいれば、眼鏡をかけている者もいる。眼鏡の学生は真面目な印象を与える傾向がある。
- (6)では、先行する文脈において、眼鏡をかけた学生

の存在が示され、「眼鏡の」はその特定の学生を指示する機能を持つ。(7)では、先行する文脈で示された学生という属性を持つ複数の要素を含む集合から、眼鏡をかけた学生を要素とする部分集合が選択される。同様に考えていくと、(3b)や(4b)を容認する文脈を想定することはそれほど困難ではない。

(8) 今入り口のところに男の人が 2 人立っているでしょう。  
上着の男性が今度うちの学部に来る専任講師ですよ。

(9) 下駄や草履の人は履物を簡単に脱げるのだが、靴の人はここに座って靴を脱いだり履いたりしている。

(8)における「上着の」は、(6)と同様に指示機能を持ち、(9)の「靴の」は(7)と同様に限定機能を持つ。上記の点を配慮すると、(1b)や(2b)を容認度の低さは、「NP<sub>1</sub>の」が同様の機能を担うような文脈を考えるのが困難であることから来ると考えられる。複数の男性の集合から一部の数の男性を限定するためや、特定の男性を指示するために「髪」の有無を使用することは考えにくく、「性格」の有無を人物の限定や指示に使用することも考えられない。

以上をまとめると、NP<sub>1</sub>がNP<sub>2</sub>の部分である「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」句は、「NP<sub>1</sub>の」という修飾句が文脈に貢献しなければならぬという語用論的制約を受けていると考えることができる。NP<sub>1</sub>を持つという属性によって、NP<sub>2</sub>の属性を持つ要素の集合からさらに限定した集合(あるいは個)を同定するために貢献するという文脈的制約によるものであると考えられる。このような文脈的貢献を Sperber & Wilson (1986) はコンテキスト効果 (contextual effect) と呼ぶ概念によって説明している。(8)の「上着の男性」という表現に可能な解釈は多々あるが、聞き手はその直前の文脈で示された 2 人の男性のうちの一人を示しているとする解釈が最大のコンテキスト効果を持つことからその指示機能を受け入れる。(7)は、学生という集合のうちの「ある」部分集合が「真面目な印象を与える傾向がある」と言っているだけではない。聞き手はそこにそれ以上の意味を読み取る。すなわち、眼鏡をかけている学生は、「眼鏡をかけているから」真面目な印象を与える傾向があるという意味である。

NP<sub>2</sub>が固有名詞であり、「NP<sub>1</sub>の」が限定や指示の役割を果たさない場合に、そのコンテキスト効果はより明

らかになる。

(10) 長髪の田中さんは、髪をまとめて来てください。

(10)においては、田中さんが髪をまとめる必要があるのは、長髪だからであるという説明を与えるというコンテキスト効果をもつ。このような解釈は、「NP<sub>1</sub>の」がコンテキスト効果をもつという制約によるものであると考えられる。

#### 4. 結び

「NP<sub>1</sub>の」に課された包括的な制約は、「NP<sub>2</sub>」の属性を持つ要素を修飾することによって、文脈に貢献するという点にある。文脈を持たない独立した句レベルでの容認度判断における相違は、連体修飾句が文脈に貢献する尤度を反映させている可能性を示唆している。

#### 参考文献

- [1] Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- [2] 西山佑司 2003. 日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句 東京:ひつじ書房.

i 本稿執筆に当たり、黒田航氏より有益な助言をいただいた。

ii 本研究は科学研究費補助金挑戦的萌芽研究:課題番号21652041『「場の言語学」の構築:場の意味論と語用論』に基づく研究の一部である。

iii NP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>の意味関係を分類しようとする試みもなされているが、これを同構造の「多義性」ととらえると、発話の聞き手(文の読み手を含む)は「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」という形式の語連鎖に遭遇するたびに、「多義性の解消」という認知的付加の高い処理をしていることになる。本稿著者たちは、「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」の統語論的・意味論的な機序はさきわめて単純であり、そこに語彙知識・言語的文脈・世界常識・言語外的文脈が相互作用することにより意味の多様性が生じるという立場に立つ。

iv ここで\*を付すのは、前後の文脈がないという特殊な状況において\*を付した表現の意味を想像することが(比較的)困難であるという著者たちの判断を示す。

v 毛髪の場合、通常はその欠如を示す語が有標である。欠如が無標である文脈では「髪」のコンテキスト効果が十分期待できる。